

## 【論 文】

### 『三人姉妹』における「教養」の問題

秦野一宏

#### 1

ある段階、自己の歴史性を喪失する段階にまで立ち至った精神分裂病者にはもはやぶきみな印象は感じられず、人間くささのない、悟りを開いた老僧の印象が残るだけだという<sup>1)</sup>。それはとりもなおさず、病者の単なる生命的身体への頹落を物語っているわけだが、『三人姉妹』(1901年)のチェブトイキンにも一彼は分裂病と診断されたわけではないけれども一同じようなことが言えるのではないか。

「ひょっとすると、我々はただ存在しているように見えるだけで、実際はいないのかもしれない。わたしには何もわからない、誰だって何もわからないんだ<sup>2)</sup>」(第3幕)

このチェブトイキンの有名なせりふは、チューホフの作品、書簡からのテーマ別抜萃集である『チューホフの言葉』にも、「達観」と題して収録されている<sup>3)</sup>。なるほど、何事にも動じなくなるチェブトイキンは、達観の域にまで達したかに見える。しかしその「達観」の内実は、老僧の枯れた悟りの境地などとは似ても似つかぬ代物である。

チェブトイキンの口癖は「どっちみち同じことさ」。「どっちみち」という日本語にはすべてを投げたような、ペシミスティックな響きがあるが、原語は всё равно で、字義どおり訳せば「すべては等しい」になる。この言葉を彼は、たとえばこんなふうにする。トゥーゼンバフ男爵は決闘で殺されるかもしれないと心配するマーシャに、彼は言う—「男爵はいい人だが、男爵が一人増えようと、一人減ろうと同じことじゃないか。放っておきなさい! どっちみち同じことさ!」(下線は筆者、以下同じ)。下線部分を「すべては等しい」と読み替えれば、なにやら哲学めいたものになる。現実世界の対立差別など、すべては虚妄に過ぎぬと説く荘子の万物斉同の哲学が脳裏をよぎるが、類似するのはもちろん、上面だけのことにすぎない。

チェブトイキンの всё равно は精神の運動の上昇ではなく、下降によって引き出されたものである。彼は藁のような、まがい物の「達観」や哲学もどきに縋りつかねばならないほど、—それほどまでに墮ちてしまった。それほどまでに、彼は自身の生活の空虚さに圧倒されてしまったのだ。こうありたいという内なる願いと、自身のみすばらしい現実の姿との落差が彼を苦しめる。

医者としての能力・技術はとうから失われているにもかかわらず、彼は治療行為をやめられない。ある患者が死ぬ。「あの女が死んだのはおれのせいだ」と自分を責めてはみるが、できる事といえば大酒を飲んで荒れることだけ、<sup>なりわい</sup>生業を捨てることはできない。というのも、そんなことをすれば、あと少し辛抱すればもらえるはずの軍医としての恩給がふいになっ

てしまうからだ。チェブトイキン「社交」を求めてクラブに通う。クラブではみんながシェークスピアだの、ヴォルテールだのを話題に談笑している。ほんとうは「小さな本一冊読みとおしたこともない」くせに、彼は作り笑いを浮かべて、シェークスピアもヴォルテールも「読んだような顔」をする。こうしたことが卑劣で、俗悪であると感じる感性はチェブトイキンにも有り余るほどあるのだが、改めようとする意志がない。改めるどころか、彼は、他の人々を卑しい自分と同列に置くことによって心の平安を得ようとするのである。「他の奴らだって、おれとおなじことじゃないか。И другие тоже, как я.」「わたしには何もわからない。誰だって何もわからないんだ」。引用はどちらも第3幕。第4幕の彼はすでに「おだやかな気分です」過ごすことができるようになっていて、何事にも動じない<sup>4)</sup>。トゥーゼンバフが殺害されたことを三姉妹に告げたあとの愁嘆場でも、彼はのんきに歌を口ずさむ。そして「どっちみち同じことさ! どっちみち同じことさ!」と、くだんのせりふをつぶやくのだ、新聞を読みながら……。

チェブトイキンのポケットにはいつも新聞が入っている。「ポケットに新聞を入れ、別のを取り出す」というト書きがあることから考えれば、読んでいるのはどうやら一紙ではないらしい。新聞に対する彼の執着は尋常ではなく、歩きながら読んだり、会話の途中で読みだしたり、時にはなにやらメモさえとっている。いったい新聞の何が彼を惹きつけるのか。

新聞にはそれなりの効用がある。当時、実際に大手の新聞（「ルースコエ・スローヴォ」）を発行していたイワン・スイチンは、その効用を次のように書き記している。「彼〔新聞〕は一瞬間も貴方を退屈させない。／（…）彼は貴方に言う。一ちょっとの間、自分の暮らしのことを忘れて下さい。ほかのことに心を向けましょう。全世界の生活に心を向けましょう。／彼は貴方の手を取って、今しがた興味深いことの起こった所へ連れてゆく。／戦争、議会、お祭り、大破局、刑事訴訟事件、学術会議へ連れてゆく。／〔貴方は〕半時間全世界の生活を知って楽しみ、信念、興奮、愛情に満ちた状態になる<sup>5)</sup>」。

新聞は「自分の暮らしのこと」を束の間ながら、忘れさせてくれる。つまり、新聞には酒や賭博と同じように、現実が押しつけてくる憂さを晴らす効果があるということだ。チェブトイキンのように新聞をのべつ幕なしに読みつづけていれば、その効果も大幅に持続するだろう。しかし、何事も限度を超えれば、弊害が出てくる。新聞の場合、現実の苦しさを忘れることができるのは、雑多なこと、とりわけ「今しがた」起こった様々なことに関心を集中するからである。抜け毛を防ぐ方法、チチハルで天然痘が大流行していること、バルザックがベルギーシェフで結婚したこと、等々の相互に関連のない内容の記事をチェブトイキンは大量に読む。読めば憂さは晴れるかもしれないが、関連のないものを次々と無批判に呑み込むことによって、精神は衰弱してしまう。物事を統合し、関連づける能力が失われるのだ。雑多な詰め込みはまた、度が過ぎれば、人として忘れてはならぬ貴重な過去の記憶まで消し去る恐れがある。チェブトイキンは昔、三姉妹の母親に「夢中で惚れこんでいた」が、当の相手が彼のことをどのように思っていたか、それはもう「覚えていない」。彼女のへの思いを振

り切れないでいたからこそ、彼は独り身でいたはずなのに……。自己の歴史の核となる部分をチェブトイキンはずで忘れてしまっている。

新聞は、憂さを取り除くこと以外にも効用がある。雑誌もそうだが、たとえ薄っぺらな内容であっても、とにかくそこから「全世界の生活」について何らかの知識を得ることができるのだ（一ニーチェはその安直さを受け入れる知識人を批判し、「新聞雑誌がまさに教養にとって代わっている」と警鐘を鳴らしていた<sup>6)</sup>）。一冊の本も読みとおせないチェブトイキンだが、新聞さえ読んでいれば、「教養人」の仮面をかぶることができる。彼は、ドブロリュポフが何を書いたかということはまったく知らないけれども、「ドブロリュポフという男がいたことは新聞で知っている」。バルザックの作品は読んだことがないけれども、この作家がウクライナのベルギー・シェフで結婚したという事実は新聞から仕入れてある。こうした安直な知識を数多く積み重ねておけばそれで十分だ。なぜなら彼の目的は教養人になることではなく、「教養人」だと自任する人々との「社交」にあるのだから。

独り身のチェブトイキンには「社交」がぜひとも必要であった。60間近という年齢もある。結婚なんて退屈なだけだ、こんなものは必要ないですよとこぼすアンドレイに、彼は思わず本音を漏らす。「それはまあ、そういうものかもしれないが、孤独というのね。何のかんのと理屈をこねても〔哲学しても〕、なあきみ、孤独は恐ろしいものだよ……」（第2幕）。一ゆきつくところは孤独である。「孤独は恐ろしい」という言葉を口にした瞬間、心の奥底から不安が立ちのぼってきたのだろう、ここでも例によって封印の呪文をとらえている。「もっとも、本質的には……もちろん、まったくどっちみち同じことさ」と。

## 2

チェブトイキンは雑誌にも手が届かず、ただもう新聞だけで間に合わせてしまったけれど、「教養人」をもって自任する人々はたいてい、多くの本を読む。『三人姉妹』の登場人物の中では、マーシャ、ヴェルシーニン、トゥーゼンバフ、アンドレイあたりがよく本を読んでいるようだが、問題は読み方だ。たとえば、ヴェルシーニンに向けたアンドレイのせりふの中にこんな一節がある。

「ぼくは夕べ一睡もしなかった(…)。4時まで本を読んでいて、それから横になったけれど、どうにもならない。あれこれ考えていたんですが、ここは夜明けが早く、日がいつの間にか寝室に射しこんでくる。この夏、ここにいる間に、英語の本を一冊訳そうと思っているんです」（第1幕）

二つの下線部分に妙な引っかかりを覚えないだろうか。何を読んでいたのか、何を訳そうとしていたのかということにはまったく触れられない。どうやら「4時まで」読んでいた本は英語の本だったらしいが、それにしても、眠れなかったのは「英語の」本を読んでいたせいであるというのは変だ。要するにアンドレイがここで言いたいのは、フランス語やドイ

ツ語なんて誰でもできるが、自分は「英語」も知っているということなのだ（「ほう、あなたは英語をお読みになるのですか」とヴェルシーニンも反応する）。彼にとっては、何を読むか、その内容よりも、どれくらい読むか、何語の本を読むかということの方がはるかに重要であった。

このアンドレイの「読書」は、チーチコフの召使であるペトルーシカ（『死せる魂』）を想い起こさせる。彼も読書が大好きなのだが、読む本はラブ・ロマンスでもいい、ただの初等読本、祈祷書でもいい、本なら何でもござれで、たとえ化学の本であっても選り好みはしない。というのも、彼は読む本の内容ではなく、ものを読んでいるプロセスが好きだったからだ。アンドレイも、ペトルーシカと同じく、学のある人という自己イメージに強いこだわりをもっていた。

アンドレイの身につけている「教養」を考える上で、見逃すことのできないのは、砲兵将校であった父親の影響である。「パパの希望で」彼は、学問で身を立て、モスクワ大学の教授、「ロシアが誇る有名な学者」になることをめざしていた。何に関心をもっているのか、何を専門とするのか、—そんなことは枝葉末節、どうでもいいことで、とにかく「有名な」教授になりさえすればそれでいいのだ。父親はこの輝かしい夢を実現させるために、厳しい管理の下、息子に徹底した詰め込み教育を施した。

「パパ」の影響力はアンドレイばかりではない、彼のきょうだいたちにも及んでいる。「我々は教育でひどく苦しめられてきたんですよ」とアンドレイは言うが、実際、三姉妹たちはみな、アンドレイと同じようにフランス語、ドイツ語、英語の3カ国語を習得させられている。語学の才があると見込まれたのか、イリーナに至っては、イタリア語まで詰め込まれている。バイオリン、ピアノなどの習い事もおそらくは強制的なものであった。それはもう「並大抵の苦勞じゃない」。当人たちにしてみれば、苦勞に苦勞を重ねて身につけた自分たちの「教養」が、余計なもの、無意味なものでなかったと信じたいだろう。しかし、首都から遠く離れ、鉄道の駅まで行くのにさえ20キロの道のりがある地方の市<sup>まち</sup>では、彼らの「教養」は使い途がない。使い途がないまま、苦勞の結晶が朽ち果ててゆく、その無念さをイリーナはこのように語っている。

「……思い出せないわ。イタリア語で窓はなんというのか、あの天井はなんというのか。…  
…何もかも忘れてゆく、毎日忘れてゆくわ。だのに生活は流れて行って、決して元には戻らない」(第3幕)

かけがえのないものが跡形もなく消え去ってゆくことへの恐怖。『三人姉妹』の登場人物たちはみな、この恐怖に怯えている。かけがえのないとまでは言えないにしても、イリーナにとって、オリガもマーシャも、アンドレイも知らない「イタリア語」は彼女のアイデンティティと深く関わる最もたいせつな知識であった。—しかしなぜ彼女は、苦勞して得たそのようなたいせつな知識を、守る努力もせず忘れるままに放置していたのだろうか。

ひと言でいえば、管理する者が死んだからである。父の死後、アンドレイからだは「まるで重圧から解放されたように」ぐんぐん太りだし、精神も怠惰になっていった。英語の翻訳にも実際に手をつけたかどうか、あやしいものである。また、ピアノを「すばらしく上手に」弾くことのできるマーシャも、父親の死後ずっと弾いていない（第3幕の時点で3年）。彼らの「教養」は父親の頸木くびきのもとで強制され、父親向けに装われたものであり、その獲得には喜びが伴わなかった。だからこそ、頸木がはずれてしまうと、「教養」そのものの意味まで失われてしまったのである<sup>7)</sup>。チェーホフは兄ニコライに宛てた手紙の中で、教養を身につけ、それを保持するためには「日夜たゆまぬ骨折り」と「意志」が必要だと述べている<sup>8)</sup>が、自律もなく喜びもないところに、持続する強固な「意志」が育つ道理がない<sup>9)</sup>。

きょうだいたちを抑えつける父親の力は絶大である。三姉妹は父親の教育的管理の下で、適当な折に恋愛することができなかつたのではないかと、想像を逞しゅうする評者がいてもふしぎではない<sup>10)</sup>。少なくとも、学校を出たばかりのマーシャが、「パパの希望で」クルイギンと結婚させられたのは事実である（「私は18の時に嫁にやられました *Меня выдали замуж, когда мне было восемнадцать лет*」）。ただ、この父の選んだ花婿が最初から気に入らなかつたわけではないらしい。幸福を「ひとかけずつ」手に入れて、「そのつど」なくしてきたという第4幕のマーシャのせりふから判断すると、クルイギンとの生活も結婚当初は幸せなものだったようだ。自分でも夫は「すごく学があつて、頭がよく、えらいように見えた」と回想しているし、妹のイリーナも、当時の姉にはクルイギンが「いちばん頭のいい人に思えた」のだと語っている。

父親も、父親の教育方針どおりに育つた娘も、幸福をもたらしてくれる「頭のいい〔知的な〕」人だと信じたこのギムナジウムのラテン語教師は、実際にはどんな男であつたか。

クルイギンは、自分でも「頭がいい人間」と高言しているが、これはあくまで「すこぶる多数の人々よりも」という条件付きである。彼は「すこぶる多数の人々」を平然と見下ろすことができるが、「最高に頭のいい *умнейший*」校長に対しては平身低頭、忠実な下僕である。この男には自分の頭で考えることも、決断することもできない<sup>11)</sup>。「生徒監」になるや、「これがしきたり、*modus vivendi*〔生きる方便〕」だと、校長のまねをして口髭を剃り落とす。形式主義者の校長を見習っているのか、「みなさん、今日は日曜日です、休息の日です、休息しましょう、おのおの自分の年齢と身分に応じて楽しみましょう」などと、空疎な作文を思わせる、まるで伝達価値のない言葉をまきちらす。—このような俗悪きわまりない人間を理想的だと思いこんでしまった原因はひとえに、マーシャたちが、「ラテン語の結果をあらわす *ut*」の用法を知っていたり、窓や天井をラテン語で言えたりすることに多大な価値を見いだしていたことにある。知識に目が眩んだのだ

マーシャは幻滅を感じながらも、クルイギンの俗悪さにはそのうちに「慣れてしまう」。ただ、「社交的な」校長の肝いりで開かれる夫の教師仲間とのパーティや、彼らとの「社交的な」散歩のくりかえしには、もう耐えられないほどうんざりしていた<sup>12)</sup>。そんな時に、彼女の前にヴェルシーニンという新たな「教養人」が現れるのである。クルイギンとの生

活に疲れ果てていたマーシャにとって、未来のすばらしい生活を予言し、そのすばらしい生活と自分たちの勝ち得た「教養」とが無縁ではないと説く彼は、まさに救いの神であるかのように見えた。

3

ヴェルシーニンも「たくさんの本」を読む。彼が「たくさんの本」を読むのは、チェブトイキンのように「社交」のための知識が必要だったからではない。アンドレイのように学者ぶりたいとも彼は思っていない。ヴェルシーニンの目的は—彼の言葉によれば—、生きてゆく上で支柱になるような真理、「最も大事なこと、本当のこと」を知ることであり、実際彼は、それを知ることができたと自負している。

彼の見いだしたその真理とは、①「我々はただ、働いて働きぬくだけ」だ、②「我々には幸福はない、あるはずもないし、これから先もない」、③「幸福は我々のずっとあとの子孫にめぐってくる」、となる（①～③は第2幕のトゥーゼンバフに語ったせりふより引用）。—しかし、彼の言葉は全面的に信用できるのか、ほんとうにこれらは「本当のこと *настоящее*」なのだろうか。

まず①だが、第1幕ではヴェルシーニンは、未来のすばらしい生活を「予感し、待ち望み、夢み、その準備をしなければならない」と語っている。トゥーゼンバフはこの言葉を聞き、わが意を得たとばかりに、未来の生活に「今、遠方からでも参加するためには、それに対し準備しなければならない、働かなければならないのだ」と応じた。まさに意見は一致し、話もはずむところなのだが、ヴェルシーニンの答えはじつにそっけない。「そうです да」の一言。そしてそのすぐあとに彼が口にする言葉は、「しかし、お宅には花が多いですね!」。話題は突然変えられ、勢い込んだトゥーゼンバフは無視されたかっこうになる。要するに、ヴェルシーニンの関心は「働くこと」にあるのではなかったのだ。彼が主張したかったのは、自分たちは祖父や父が見て知っていたことよりも、もっと多く見て知るべきだということ、—それだけのことだ。トゥーゼンバフの抱いているような、額に汗して働くといった肉体労働に結びつくイメージは、ヴェルシーニンの関知するところではない。第2幕の「働いて働きぬく」というのは、単なる言葉のあやであり、「働く」という言葉を好むヴェルシーニンへのリップ・サービスであった。

②の「我々には幸福はない」についてはどうか。これに対してはトゥーゼンバフが次のように反論している。「あなたの考えにしたがえば、幸福を夢みることさえできないことになる! しかしぼくがいま幸福であるとすれば!」。対する答えとして予想されるのは、ヴェルシーニン自身の考えている「幸福」が、トゥーゼンバフの考える「幸福」といかに違っているか、その具体的説明である。たとえば、ヴェルシーニンと同じく「幸福はないし、あるはずもない」と語る『すぐり』(1898年)のイワン・イワーヌィチは、「幸福」についてこう説明している。「幸福な人がよい気分でいられるのは、不幸な人が黙って自分の重荷を背負っているからで、この沈黙がなければ幸福なんてありえないだろう<sup>13)</sup>」。不幸な人が「重

荷」を背負わなくてもすむようになってはじめて、真の幸福が訪れるとイワン・イワーヌィチは言うのだが、このような考え方はヴェルシーニンには縁がない。彼の答えはここでも冷ややかで、「ちがいます Her」のひと言で終わる。他人の感じる幸福の感覚までもヴェルシーニンは否定するのである。チェプトイキンと同じように彼もまた、人がどう感じようが、どう考えようが、それは間違っていると断定することができるのだ<sup>14)</sup>。—いったい、ヴェルシーニンはどのようにしてこの〈ドグマ〉を作りあげたのか。

「我々には幸福はない」という考え方の核となるものは、実のところ、本から得られたものではない。それは—ヴェルシーニン自身は認めたくないだろうが—彼の実生活の中から生まれてきたものである。ヒステリックで、時々面当てに自殺を企てる妻と二人の娘をかかえての、辛くてやりきれない生活。彼はあちらこちらで愚痴はこぼすが、トゥーゼンバフの言うように、ひたすら「我慢している」。しかし、ただ我慢するだけではあまりにも哀しい。そこで考え出されたのが、自分は幸せではないという事実を本から得た知識で脚色して、「我々には」幸福はないという〈哲学〉に置き換えることであった。チェプトイキンと同じく彼もまた、〈私〉を普遍化することで、たえがたい現実をしのぎやすくしようとしたのだ。—彼らと議論などしても無駄である。そもそも他人の真実など無関係なところに、彼らの〈哲学〉は成立しているのだから。

いかに彼が自分の〈哲学〉に固執し、他人の真実を信じようとしなないか、そのことを示す恰好の例がある。ヴェルシーニンはパナマ疑獄で有罪になったあるフランスの大臣の話をする。この大臣は彼によると、獄窓から眺めた小鳥のことを「陶醉し、感激を持って」日記に書いているというのだが、興味深いのは、それを讀んだヴェルシーニンのコメントである。

「もちろん、出獄した今は、もう以前のように、小鳥なんか気にとめていない。それと同じで、あなた〔マーシャ〕もモスクワに住むようになってみれば、モスクワなんて気にもとめなくなりますよ。幸福は我々にはない、あり得ないんだ。我々はそれをただ願い求めるだけです」(第2幕)

「もちろん конечно」という一語の中に、彼の〈哲学〉の本質がある。小鳥のすばらしさを語る獄中の大臣の「感激」を真に感じとることなど、彼にはできない。出獄したあとの大臣が小鳥の美しさを感じつづけることもあり得るのじゃないかと、思いを致すこともできない。自然との出会いも、それによってひき起こされる改心も再生も、彼にとってはたわ言にすぎない(彼は「たくさんの本」を讀むというが、その読み方はこの例からある程度想像がつく)。

所詮、今を生きる人間とはこんなものだという暗くわびしい考え方であるが、そのわびしさをふりはらうかのようにヴェルシーニンは、「ずっとあとの子孫たち」には「我々にはない」幸福が待っているはずだと考える(③)。一挙には変わらないが、「少しずつ」よい方向に向かってゆくというわけだ。

「地上のあらゆるものは少しずつ変化すべきものだし、もうすでに我々の眼の前で変わりつつあるように思います。200年、300年、あるいは1000年たったら一期限は問題ではないが—新しい、幸福な生活がやってくるでしょう」(第2幕)

このせりふの内容はしかしながら、同じ未来を語った第1幕のヴェルシーニンの言葉と微妙に異なっている。マーシャが自分たちのもつ知識など無用の長物に過ぎないと嘆いた時には、彼はこう慰めていた。

「(…)言うまでもなく、あなた方は周囲の無知蒙昧な大衆に勝てるはずはありません。一生のうちにはあなた方も、少しずつ譲歩しなければならなくなって10万の群衆の中に紛れこみ、生活に押し殺されることになるでしょう。しかしそれでも、あなた方は空しく消え去ったりはしないし、影響を残さずに終わることもありません」

ここでは三姉妹の生活は、彼女たちの生きている間は「少しずつ *мало - помалу*」悪くなってゆくと語られている。一方、第2幕では、「あらゆるもの」は「少しずつ」良くなり、その変化は「すでに我々の眼の前にある」と言われている。どうもつじつまが合わない。人間は未来の生活のために「準備しなくてはならない」と第1幕では言っていたのに、第2幕では「働いて働きぬく」というトゥーゼンバフ好みの言葉に変えられていたことが思い出される。一じつは、この変わり身こそ、ヴェルシーニンの〈哲学〉の大きな特徴なのである。第1幕と第2幕の間には、何年かの時が流れている(第1幕では恋人同士であったアンドレイとナターシャだが、第2幕になると、二人はすでに結婚し、赤ん坊も生まれている)。この時間のなかで、ヴェルシーニンの〈哲学〉は形を変え、より甘ったるい、迎合的なものになってゆくのである。さらに時間の経過した第4幕では(ナターシャはすでに二人めの子どもを産んでいる)、「生活が明るく輝きわたるのも、そう遠い時ではないようです」と、現在とすばらしい生活が到来するはずの輝かしい未来を隔てる時の長さが、一挙に短縮されている。

輝かしい未来は、いま自分が巻きこまれている辛い現実から目をそらすために必要なだけで、その到来時期など、どこに設定してもいいのである。三姉妹同様、ヴェルシーニンの〈哲学〉に感染したアンドレイは、無意識のうちにこのことに気づいていた。

「現在には嫌気がさす。そのかわり未来のことを考えると、なんてすばらしいのだろう! 気も軽くなり、のびのびしてくる。遠くの方で光が射しはじめ、自由が見える。おれや子どもたちが、怠惰な暮らしから、クワスから、キャベツ付きの鷲鳥から、食後の昼寝から、卑しい寄食生活から解放されて自由になるのが見える」(第4幕)



輝かしい未来をいつに設定しようとも、実際にはそんなものは来るはずがないことをアンドレイは知っている。「食後の昼寝」すら自分の意志でやめられない彼に、そもそも「解放された」未来など語る資格もない。「お茶が出ないのなら、哲学でもやりましょう」とヴェルシーニンが言ったが（彼の妻は食事も作ってくれず、空腹で、せめてお茶を飲みたかったのだ）、アンドレイもお茶代わりに、師の〈哲学〉をちょっとやってみたにすぎない。もちろん、ヴェルシーニンがこんなふうに自身の〈哲学〉を露骨に、生のままで語ったとすれば、マーシャの恋心も一度にさめてしまったことだろう。「多くの本」から学んだ加工のテクニック、雄弁術、言い換えれば、彼の「教養」にくるまれていたからこそ、ヴェルシーニンの〈哲学〉は彼女を魅了しえたのである<sup>15)</sup>。

#### 4

プローゾロフ家のきょうだいたちはみな、知識と技能だけでなく、驕という面からも「教養人」になるように育てられてきた。このプローゾロフ家の驕について、長女のオリガはナターシャとの話の中でこう言及している。

「わかってちょうだい、ねえあなた…… わたしたちはきっと変な驕を受けてきたのかもしれないけれど、あんなことには耐えられないわ。あんな態度を見ると、わたし、気がめいて床に伏してしまう…… まったくもう力が抜けてしまうの!」(第3幕)

「あんなこと」とは、ナターシャが80歳になる乳母のアンフィーサを、「わたしのいるところでよくもまあ、坐ったりできたもんだね! 立つんだよ! あっちへお行き!」と怒鳴りつけたことを指す。オリガはこのような「粗暴なふるまい грубость」に接すると、胸が苦しくなってくる。オリガと同じような驕を受けたマーシャも、ヴェルシーニンにこう語っていた。

「(…) 一般的に言って、文官の中には粗暴で、思いやりのない、無教養な人がとても多いですわ。粗暴なふるまいを見ると、わたしは胸がしめつけられ、気分が悪くなりますの。デリカシーや柔和さ、思いやりに欠けた人を見ると、辛くなってきますの」(第2幕)

このようにプローゾロフ家のきょうだいたちはみな、「無教養な人」のがさつで無神経なふるまいを嫌悪する繊細な感受性をもっているわけだが、彼らには「無教養な人」のふるまいを抑えることはできない(「力が抜けてしまう」)。それどころか、自分の意に染まない、空虚な生活をつづけているうちに心もすさみ、自身が「粗暴なふるまい」に及ぶことさえある。たとえば、電信局に勤め、その「詩情も思想もない」仕事に飽きあきしていたイリーナは、息子の死をその兄に電報で知らせようとする女性に対して、「これという理由もないのに」乱暴な口をきく。学者になるという夢も潰え、妻には理解されず、きょうだいたちからも疎外されていると感じつづけているアンドレイは、市会の守衛フェラポントに癩癩玉を

破裂させる。

ひとりオリガだけは、ナターシャの「粗暴なふるまい」にせいっぱいの抗議をする。しかし、彼女の言葉は聞きいれられるどころか、逆に火に油を注ぐような結果となった。「明日にもあの老いぼれの泥ぼう猫〔アンフィーサ〕、くたばりぞこないの婆ア、追ん出してやる」と、ナターシャは逆上する。この荒々しい、野卑な言葉に対しては、オリガはもう抵抗することはできない。第4幕、ナターシャが小間使いを手ひどく罵倒する場面では、他の者たちはもちろん、オリガも沈黙を守っている<sup>16)</sup>。

ナターシャは周りの人々の無抵抗をよいことに、何でも自分の思いどおりにことをすすめてゆく。プローゾロフ家のきょうだいたちは、何をされても一部屋を追い出されても、財産を奪われても一ただもう耐えているだけだ。3.パベルヌイはこのような忍従の状態を評して、彼らは「まるで魔法にかけられているようだ」と述べている<sup>17)</sup>が、苦しむことだけを美德だとする彼らの「教養」こそ、その魔法の正体なのである。この「魔法」のおかげで「粗暴な」ナターシャは、プローゾロフ家の人々を制圧し、家をのっとることができたのだ<sup>18)</sup>。

粗暴といえば、ナターシャですら驚いて身を引いてしまうような男が登場人物の中にある。ソリョーヌイだ。ナターシャが赤ん坊の自慢をしていると、この男はユーモアのつもりか、「その赤ん坊がもし自分のだったら、ぼくはフライパンで焼いて、食べてしまいますね」と恐ろしいことを言う。さすがのナターシャもこのような無神経な言葉を聞くと、思わず両手で顔を覆って、「粗暴な人! 無教養な人!」と叫ばざるを得ない。

この「無教養な」ソリョーヌイが、粗暴の極致である殺人をひき起こす。いつもポケットに香水をしのばせているレールモントフ気取りのこの男には、演技と現実の区別がつかない。彼は、自分の演技が演技でないことを演技で示すために、〈恋敵〉のトゥーゼンバフを決闘に追いこみ、本当に(=演技で)殺してしまう。

しかし、この殺人は事前に食い止めることもできたのである。決闘の介添え役を依頼されたチェプトイキン、アンドレイにもマーシャにも、決闘があることを前もって教えている。ただ、介添え役を含め、誰もそれを止めようとして行動を起こしはしなかった……。

決闘の行なわれる時間と場所を教えられ、さらには、ソリョーヌイにとって決闘はもう3度目だが、トゥーゼンバフは未経験であるということまで知らされたマーシャは、平然としてはられない。

「頭の中が混乱してしまった……。やっぱり、そうよ、二人に〔決闘を〕許すべきではないわ。彼は男爵を負傷させるかもしれない、殺してしまうことだってないとは言えないもの」

決闘という粗暴きわまりない行為が今まさになされようとしているかと思うと、「胸がしめつけられ、気分が悪くなる」。決闘は許すべきではないという考えが出てくるのも、この「教養人」としての感受性をもっていれば当然のことだろう。しかしこの感受性もたよりないので、気分が変わると、考えは瞬く間に消えうせてしまう。ヴェルシーニンとの別れが差し

迫っていることに思いが至ると、人の生死に関わることであっても、彼女はそれをよそ事として忘れてしまえるのである。次に彼女が口にする言葉は、「決闘をやめさせて!」ではなく、「ヴェルシーニンが来たら、教えてね」であった。—これがマーシャの「教養」の限界なのだ。彼女は空を見上げ、自由な渡り鳥たちをうらやみながら、その場を立ち去ってゆく。

アンドレイになると、「粗暴なふるまい」に対する感受性すら、もう磨滅しかかっている。

「ぼくの考えでは、決闘の当事者になるのも、たとえ医者としてであろうと、その場に立ち会うのも、まったく不道徳ですね」

第三者的立場で、冷静な判断を下しているといえは聞こえはいいが、要するに無関心なだけなのだ。ちなみに彼の次のせりふは、「うちの家もさびしくなるなあ。(…)家に残るのはぼくひとりだ」。—マーシャもアンドレイもともに、「男爵が一人増えようと、一人減ろうと同じことじゃないか」というチェプトイキンの言葉に、暗黙の同意を示しているのである。

チェプトイキンの言葉に同意するのは、彼らだけではない。当の男爵自身も、どっちみち同じことだと思っているのではないか。1 時間後に戻ってくると言うけれど、「さよなら Прощай」とイリーナに別れを告げた時には、彼はもう死ぬ覚悟でいたのだ。「きみが書いてぼくにくれたものは、ぼくの机のカレンダーの下にありますよ」。これはまさしく、永遠に去り行く者の吐くせりふである。

トゥーゼンバフが生きる気力を失ったのは、イリーナが彼を愛することなく、結婚を承諾したからだ。5 年間、イリーナを愛しつづけた彼にとって、彼女との結婚はたしかに大きな喜びではあったけれども、その喜びが大きければ大きいほど、愛されていないと自覚することは辛くなる。「わたしはあなたの妻になります。忠実で従順な妻になるわ。でも愛はないの、しかたないわ!」。相手の胸にこの言葉がどのように突き刺さるか、その残酷さをイリーナはまるで考えていなかった。

イリーナは姉のオリガから、「愛情にたよらずに」、尊敬から結婚することを勧められた。たとえ相手がどんな「醜男」であっても、「ちゃんとした人」なら「どっちみち同じことだ」と、オリガは言った。イリーナは姉の言葉を受けいれ、「ちょっと考えて決心した Подумал и решила」。—ここには相手に対する思いやり、誠実さなどというものはかけらもない。あるのは自分の生活に対する不満とわが身かわいさの妥協、損得勘定だけである。

「教養ある流浪者の悲惨」。ある評者はそこに『三人姉妹』の主題を見た<sup>19)</sup>。しかしこのような見方では、「悲惨」の方に力点が置かれ、三姉妹たちの「教養」そのものは自明のものとして扱われてしまう。「教養」の質は問われぬままになってしまう。マニーロフ夫人(『死せる魂』)は「家庭生活に欠かすことのできない」フランス語を話せ、「夫に気持ちのいいひと時を与えるための」ピアノも弾く。ナターシャだって時々必要もないのに、会話にフランス語を混ぜることができ、ピアノだって「乙女の祈り」だけは弾くことができた。イリーナやマー

シャから見れば、この程度のもものでは「教養」と呼ぶにあたいしないのかもしれないけれど、かといって三人姉妹の身につけた「教養」が、マニーロフ夫人やナターシャのものとは質の異なる真の教養であったとは言えないのである。

すでに触れた兄にコライに宛てた若き日のチェーホフの手紙には、「教養人は人間の人格を尊重します」という一節がある<sup>20)</sup>。チェーホフの考えていた真の教養とはこのように、精神のあり方と深く関わるものであったのだ。彼はまた、スヴォーリンに宛てた手紙の中で、「わたしは精神の動きの虚弱さや衰弱を軽蔑するし、それと同様に怠惰も軽蔑します」と述べている<sup>21)</sup>が、精神の動きの能動性はすでに見たように、プローゾロフ家のきょうだいたちの「教養」とは相容れないものであった。彼らはオリガの言うように、「変な躰を受けてきた」のである。

最後に、プローゾロフ家のきょうだいたちの「教養」のいびつさを示す例を、もう一つだけ加えておこう。第4幕、乳母車を押すアンドレイを見て、マーシャはこう慨嘆した。

「すべての希望がだめになったわ。何千人もの人々が鐘を吊り上げようと、労力とお金をどっさり使ったのに、鐘は落ちてこなごなになってしまった。突然、わけもなくね。それと同じよ、アンドレイも……。」

「鐘」を吊り上げるのに多額の金がかかった。一何という比喩だろう！ 身につけた「教養」が結果として使い途がなかったこというのなら、まだ理解できるが、「教養」は見返りを求めて身につけさせられるものだとはい……。あるいは父親がそう考えているだけなら、それほど気にすることはないのかもしれない。恐ろしいのは、「パパの希望」、パパの考え方が抵抗もなく、成長した子どもたちに受けつがれていることだ。「教養ある」流浪者たちの悲惨。マーシャたちが真に悲惨であるのは、「教養」に対する父親の考え方を捨てられないところにあったのである。

1) 木村敏『自覚の精神病理』紀伊國屋書店、1978、197頁を参照。

2) 『三人姉妹』からの引用は、Чехов А.П. Полное собрание сочинений и писем в 30 томах. Сочинения т.13. М.,1978, стр.117-188 に拠る。

3) 佐藤清郎訳編、彌生書房、1997年、62頁。

4) 第4幕冒頭のト書きには、「おだやかな気分」は「この幕を通じて変わらない」とある。

5) エーシン、安部幸男・阿部玄治訳『ロシア新聞史』未来社、1974年、128-129頁。

6) 「われわれの教養施設の将来について」(渡辺二郎訳『哲学者の書』理想社、1980年、所収)、57頁。ニーチェの言葉を用いて言えば、チェブトイキンは、「日常の奴隷、瞬間の鎖につながれて飢えている」男である。ちなみにロシアでは早くに、ゴーゴリが、新聞は仮面をとって現れた素顔の「悪魔」だと述べ、その危険性に警告を発している(『友人との往復書簡抜萃』)。

7) アンドレイは父の死後もバイオリンを弾きつづけているが、これは孤独と他人に対する無関心の象徴となっている。彼は、みんなが火事場に駆けついたり、被災者たちの世話を奔走したりしている時でも、部屋で平然とバイオリンを弾いているのだ。

8) 1886年3月(日付なし)。前掲『チェーホフ30巻全集』書簡篇第1巻、225頁。

9) 強制の問題は『6号室』(1892年)においても取り上げられている。60年代の思想の影

響を強く受けたラーギンの父親は、息子をむりやり医学の道にすすませたが、この強制が結果的に息子の意志を麻痺させる一因になる(拙稿『6号室』(チェーホフ)論—閉じ込める者・閉じ込められる者』、『海上保安大学校研究報告』43巻1号、1997年、を参照)。

<sup>10)</sup> См.: Кривенко В. «Три сестры». — Кузичева А. П. «А. П. Чехов в русской театральной критике». М., Чеховский полиграфический комбинат, 1999, стр. 267.

<sup>11)</sup> たとえば、罹災者救済の音楽会でマーシャにピアノを弾いてもらおうという話がもちあがった時にも、彼は、そのことの是非がよくわからないので「もしご希望なら、校長に話してみましよう」と申し出る。クルイギンが決断できないのは、心の中でいつも、何事も起こらなければいいがと念じているからにはほかならない。彼はベリコフと同類の「箱に入った男」なのだ。

<sup>12)</sup> この「社会的な」散歩について、ブロイデはこう記している。「我々現代人の感覚からすれば、『社会的散歩』は「動物農場」の一齣であり、強いられた集団化のシンボルである」(Бройдэ Э. Чехов. Мыслитель · Художник (Катастрофа · возрождение). Frankfurt/Main, 1980, стр. 97.)

<sup>13)</sup> 『チェーホフ 30 巻全集』書簡篇第 10 巻、62、64 頁。

<sup>14)</sup> 〈確信する者〉たちを戯画化したのが、第 2 幕のチェプトイキンとソリョーヌイの論争である。チェハールトマは羊の肉だとチェプトイキンが言うと、ソリョーヌイは、断じてちがう、チェレムシャーはねぎだと言い張る。それに対して、チェプトイキンは、チェハールトマは羊の肉だと譲らない……。自分の言うことを絶対的に確信している彼らには、相手の言葉が耳に入らないのである。

<sup>15)</sup> マーシャがオリガやイリーナよりも強くヴェルシーニンに惹かれるのは、マーシャが自分のことを彼女たちより知的だと感じていることと無縁ではない。—チェーホフはマーシャ役を演じるクニッペルに、次のように忠告していた。「きみは自分のきょうだいよりも知的だと感じるように。少なくとも自分を知的だと考えなさい」(1901年1月21日付、クニッペル宛書簡。『チェーホフ 30 巻全集』書簡篇第 9 巻、189 頁)。「知的」の原語は умный で、「頭がいい」とも訳せる。

<sup>16)</sup> ただ、オリガは首になったアンフィーサを引き取り、自分の勤める女学校の官舎に住ませた。このようなやさしさは、他のきょうだいたちにはない。

<sup>17)</sup> Паперный З. «Вопреки всем правилам...». М., искусство, 1982, стр. 172.

<sup>18)</sup> 『谷間』(1900年)のアクシーニャは犯罪(幼児殺し)を犯すが、誰もそのことをとがめない。だから、彼女は「どえらい力」をもつようになる。ナターシャの場合も同じである。

<sup>19)</sup> デズモンド・マカーシー、丸谷才一訳「アントン・チェーホフ(『イワーノフ』『三人姉妹』)」(原卓也編『チェーホフ研究』中央公論社、1969年、所収)、456頁。

<sup>20)</sup> 『チェーホフ 30 巻全集』書簡篇第 1 巻、223 頁。

<sup>21)</sup> 1897年4月17日付書簡。『チェーホフ 30 巻全集』書簡篇第 6 巻、326 頁。